

お浄土のしおり 善導寺寺報～秋のお彼岸号

巻頭の言葉

如来は蓋われること無き大悲をもって三界を矜哀たまう
 世に出興される所以は、道の教えを光のごとく闡かされたまい
 生きとし生けるものを拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲されてなり
 無量億劫にも値い難く見たてまつり難し
 猶し靈瑞華の時ありて乃ち出ずるが如し
 『仏説無量寿経』

1 仏教の目的は、「解脱・涅槃」です。

前号で、「涅槃」に至った「阿羅漢」と言われた方々は、「生命として為すべき倫理、道徳行為」を為し終わった方だと伝えられています、と言いました。では「涅槃」といわれる境地は、「生きているもの」としての善行為を為し終わった時の善い心の塊のような状態だろうか?との想像がございましたら、それは違います。その人にとってのなすべき善行為を完璧になしおわった結果は「涅槃」ですが、「涅槃」は善行為の終極ではありません。善行為さえも脱ぎ捨てたのちの結果だと思った方が良くといわれます。



2 善行為は「涅槃」に至るまでの道具・手だてです。

善行為は「涅槃」に至るまでの道具です。目的が達成されたら、善行為という道具も、必要がなくなります。あたかも煩悩を川の激流にたとえると、激流を渡って、陸に着くまでが、善行為です。ボートやオール

を用意して、そこに乗り、転覆しないように巧みにこいで、岸につく、ここまでが善行為であって、陸にあって、「ああ、危険からのがれてホッとしました」が「涅槃」ですが、そのときには、ボートやオール、漕ぐ行為はすべて卒業して、手放します。手放さなければ陸に上がりません。だから「涅槃」の境地は「善悪行為」の因果関係を乗り越えたあとの話です。だから、目的までは、熱心に「善行為」につとめる、という事が不可欠なのだ、という程に了解しておくのが良いと思います。これは、伝わりごとでありまして、私の私的な思い込みではありません。「善行為」はあくまでも、完璧な幸福に至るための道具です。完璧な幸福は、悟ってブッダに成る事ですが、悟る、完璧に目が覚める、という事は、善悪を超えた状態、と受け止めた方が良いでしょう。仏教で言われる「涅槃」と善行為との関係は、こんなイメージを持っておくのが良いと思います。

3 ここで、速やかに解いておきたい誤解があります。

いまだ体験していない私たちにとっては、観念的に聞こえますが、「極楽世界」と「涅槃」はちょっと違

います。共通する事もあります。「共通すること」は、どちらも「解脱」の上での世界や状態である、という事です。「苦しみ」から解き離れている、という意味です。「涅槃」は、「解脱」したことで、この世界で生きている間でも起こりえます。が、この世界で南方仏教のお坊様方が「涅槃」に向かってご努力なさっているのと同様に、極楽世界に往生した方々も、「涅槃」や「悟り」を目指して仏道修行をしているのです。それに加えて、極楽世界に往生すること自体が、この苦しみを受けることを繰り返す世界から離れることなので、「往生」すれば、この世界からは「解脱」したことになるのです。この世界をまるごと離れますから。

スリランカやタイ・ビルマなどの南方仏教のお坊様方が、この世界で人間として生きていながらストレートに、「涅槃」「悟り」を目指す道を行っています。

その方法は「四念処観」といって、あちらの言葉を使わせて頂くと「ヴィバッサナー」といいます。

この世界は、「涅槃」「悟り」を目指すのに時々刻々、いろいろな障害が発生するところなので、この世界で「涅槃」「悟り」を目指す道は難しく、個々人の能力・持って生まれた資質が問われます。



普通、もっとも優秀な人でも、三回生まれ変わって、努力を続けなければならず、もっとも資質の劣った人だと、六十劫(一劫は、この宇宙が生成してから消滅するまでの時間と考えて

ほぼよいと思います)の間、生まれ変わり生まれ変わり、「涅槃」に至る、という道理があります。(日本での伝承でも南方の伝承でも、同じ様です)

つまり仮に、涅槃に至った南方のお坊様がいらっしゃったとすれば、その方は、極めて近道を通ってきたとしても、三生前から釈迦牟尼仏陀など過去の仏陀にお会いできて、この世界で涅槃に至る方法の指導を仰いで、それから三回目の人間の生涯を現在送っていらっしゃる、ということになります。(現代において初めて仏法を聞いて、今生のうちに、「涅槃」に至った、という方も希にいらっしゃるかも知れません。ここまで推量を深めると、実は私もよく分かりません。)

日本に伝わっている浄土の教えは、「涅槃」「仏陀の悟り」を目指すにあたり、この世界で時々刻々現われる障害から避けるために、まず阿弥陀仏の「極楽世

界」に生まれて、そこで「涅槃」「仏陀の悟り」を目指します。このための方法が、「称名念仏」なのです。

この方法は、この世界の人間としての生涯においては、阿弥陀仏の本願の仏力に順う生活になるので、苦しみが完全に除去されるわけではありませんが、普通かなり安穏な生き方になり、往生ののちは、生死を繰り返すことなく(すなわち生き通しで)苦楽を離れた絶対楽を受けながら、何の障害もなく、「仏陀の悟り」「涅槃」へと自然に進む事が出来る、易しい道だと、言われます。すべての人の身の丈にあった教えだとされる所以です。

4 極楽世界の光景が、「涅槃」の光景ではありません。



「涅槃」は一人一人の独立した生命の体験する境地であり、

「極楽世界」は「この世界」と同様に多くの往生人(おうじょうにん)の方々が共通して感じているいわゆる「世界」のことです。

「極楽世界」と「この世界」の違いは、「苦しみの全くない仏陀の悟りによって成り立っている世界～諸々の楽しみのみを受ける世界～」か、

「苦しみが生まれ起こり種々に繰り返される世界」か、の違いです。

だから「涅槃」は、極楽世界の方々も各別に体験するもので、その内容は表現出来ません。極楽世界の光景そのものが「涅槃」「悟り」の内容です、ということ出来ません。これには、ご注意ください。

5 「死んだら成仏する」は間違い

以上のことから、2つの事が見えてきます。

1つは、私たちは死んで、極楽世界に生まれたとしても、それで、「成仏した」ということは、あり得ないのです。その方が、仏国土に生まれたなら、「菩薩さまになった」とは推測でいえるかも知れませんが、というか、「死んだら成仏する」という事自体が、成り立たないのです。「成仏する」というのは、「仏陀になる」という事ですから。

「仏陀になる」という事は、とてつもなく長い期間の善行が必要なのです。

お釈迦様は、人間の体を受けながら、仏陀になられた方ですが、スリランカ上座部の伝承でも、日本仏教の伝承でも、「三阿僧祇劫(さんあそうぎこう)」という長い間怠ることなくそれぞれの生涯の中で何か善の根を植えることをなされたから、その最後の生が、2500年ほど前のインドの王子になり、その生涯で、仏陀とされた、と云われます。



1劫～1カルパ～は、この宇宙が生成してから、消滅するまでの長い時間を言います。その時間が、「三阿僧祇」の数だけ連なった時間です。「三阿僧祇」という単位は、日本の数取り法ですと、「万」を1番目として、それから4けたずつかぞえて14番目、3の後に、0「ゼロ」が46個ほど連なる数だけ、宇宙が生成して消滅した時間、という事になります。(本当は、インドのその時代の数取り法でいくべきでしょう

けれども、どちらにしても、気の遠くなるような長い時間なので、すぐ頭に浮かんだ方を探りました。)

仏教では、宇宙は、ふくれたりしぼんだり、生成消滅を繰り返す、と捉えます。これだけ長い時間、生まれ変わり生まれ変わりして、善行を積んで、やっと最後の生涯に「仏陀」になられたのです(成仏したのです。)

私たちが、たったこの一生だけ、隙間無く善行をつんだとしても、おいつくはずがないのです。

だから、「人は死んだら成仏する」は、全く根拠がありません。

おそらく、江戸期か明治期に、警察官にあたる人人が、事件性のある遺体の事を指し示すのに、きたない変な言葉を使ってもいけないし、自分たちも気持ちわるくならないように、「ほとけさん」と呼んだのが、始まりなのかも知れません。(これは勝手に私が思ったことで信用に値しませんが、何かのきっかけはあったにはちがいないと思います。)

6 「年回忌の法事」を思い出してみてください

皆さんが、私どもにご依頼をなさる「年回忌の法事」を考えてみてください。「～お戒名～追善菩提(のために)」と、仏前で言葉を述べるのが決まりです。

この、「追善菩提」というのは、私たちが、そのお戒名の方の代わりに、お経を読んだり、阿弥陀様を讃えたり、お念仏を唱えた善業(追善)の結果が、そのお戒名の方の悟りが進みますように、と、阿弥陀様を中心とした、すべての仏様、仏陀に対してお願いをしているのです。

「悟りがすすみますように」というのですから、そのお戒名の方は、仏陀ではありません。仏陀でしたら、悟りが完成していて、「進む」ことは無いのですから。

お浄土で、菩薩さまとして、修行をなさっていますように、という願いも込められているわけです。ですから、人は「死んだら成仏する」事は成り立ちません。

かたほうで、法事の時に、お坊さんの「追善菩提」の表明の言葉を聞き、普段は人は「死んだら成仏する」とどことなく耳に入ってそのままですと、訳がわからなくなる事ですので、注意が必要です。

「死んだら成仏する」の方は、意味のない文化習慣上の言葉として、本当は真実ではない、とおさえておいて下さい。おそらく警察の方々などの、職業上の隠語ぐらいから端を発した話ではないかなと思うのです。

7 仏教は、観念的な、言葉あそびではありません。

仏教は、観念的な、言葉あそびではありません。釈迦牟尼仏がお説きになった仏教という教えには、抽象的、観念的な説は全くありません。たとえ、他の世界として説かれている「極楽世界」「仏国土」でも、どこかに、現実に私たちが経験する物事との接点があるのです。

だから、推し量ることができて、「そうかも知れないなあ」から始まり、「きっとそうに違いないとおもいます。でなければ、これこれの私たちの見聞きしている事が、逆に説明・理解出来なくなります。」と、こうなっていくものなのです。

ただ、「極楽世界」の事は、仏陀の境涯なので、真正面から思考・考察することはできません。

お釈迦様は、「人間が考えてはいけない事がある」とおっしゃいます。これを考えると「私はとうとうわかりません」となって、ノイローゼになるから、やめて下さい。というのです。その中に、「仏土境涯」があるのです。仏様の境地・境涯は、人間の脳では考えること、完璧に処理する事は出来ません、という意味です。

8 お釈迦様は、私たち生きている者の側に立って語られる。

先ほど、釈迦牟尼仏陀は、仏陀になられた生涯の前にも、とてつもなく長い時間、いろいろな生命となって、善業を積んできました、という伝承があります、と言いました。

仏教では、宇宙の変化、移り変わりを示す時は、生成して、変化して、消滅するという事を限りなく繰り返している、と語ります。そこで見えてくるのは、「時間のながれ」には、始まりがなく、終わりが無い、という一見不可思議にも思えるような事を語っている、という事です。

私たちは、時間の流れの中で生きています。時間が完全にストップした事を体験した人はいないと思います。だいたい、そんなことがあるんでしょうか。

普通に生きている私たち人間が体験しているのは、とぎれなく進んでいる「時間」という物事です。私たちは、「時間の始まり」がどんな状態かを具体的に想像出来るでしょうか?具体的に想像する、というのは、ご自分の日々の生活の中で時間の経過として体験しているその「時間」の体験によって、「時間の始まり」を想像出来るでしょうか?という事です。これは、「否」ではないでしょうか?「昨日」が「今日」になり「明日」になる、この時間の流れしか現実の体験はありません。「タイムマシン」というのは、あくまでフィクションです。

生命は、皆そうではないか、と推測できませんか?時間に始まりも終わりも無いと言っているのは、私たちの体験上の時間を過去や未来に引き延ばすという推測から納得出来る話です。実は、ここがポイントだと思います。生命が「実にそうだと思います」といえるのは、生命が生きている上で経験して「知って」いる事実に基づいていることが、不可欠なんです。私たちは、「時間の始まり」もしくは、その前の「時間が無い状態」を思い浮かべる事は、現実には、不可能ではないでしょうか?これは、仏教が、あくまでも「生命の感覚」の側に立って、物事を語ろうとしている一つの証拠です。決して、理解できない無理難題を押しつけているわけではありません。もっと分かりやすく言えば、「ニワトリが先か、卵が先か」という話と似ています。「何が始まりか」という思考自体が、わざと答えを得られなくしているのではないのでしょうか?今は進化論がよく言われる時代なので、これで考えれば、「ニワトリが先か、卵が先か」という発想は、地球上で、タマゴがまずパッと地上に現れたのか、ニワトリが先にパッと地上に現れたのか、という事では無いでしょうか?地球上で、タマゴがまずパッと地上に現れ

たり、ニワトリがパッと地上に現れたりということは考えにくくありませんか?

始まりがあり、終わりがある物事も私たちはたくさん見聞きしますが、そうでない物事もあるかも知れない、という事もあるのでは、とも思ってみてもいいでしょう?

「時間」がそうです。生きている上での体験から、「時間そのものの始まり」や「時間そのものの終わり～時間がストップすること～」は想像出来ませんし、推測もできません。しかし「時間の流れには始まりも終わりも無いかも知れない」という事は、あまりにも遠い過去・あまりにも遠い未来ということを考えることに成るので、捉えがたく想像しにくいだけです。私たち生きている者の「時間」の体験を過去や未来に延長して思ってみれば、推測は出来ます。仏教が、あくまでも「生命」の側に立って、物事を語ろうとしている証拠の一つです。

9 誤解その2 なぜ、宗によって教えが違うの? 真実は一つじゃないんですか?

「宗」という事は、釈迦牟尼仏陀はおっしゃっていません。法然上人の言葉で、「十二問答(禪勝房との問答)」という記録の中に、こういう言葉があります。

~~~~~  
問う、八宗九宗のほかに、浄土宗の名をたつことは、自由にまかせてたつこと、餘宗の人の申し候うは、いかが申候へき。

答う、宗の名をたつことは佛説にはあらず、みつから(自から)ころざすところの經教(お経の教え)につきて、存したる義(道理)を學しきわめて、宗義(お経の趣旨[=「宗」]の道理[=「義」])を判する事也。

諸宗のなら(習)ひ、みな(皆)かくのごとし、いま浄土宗の名をたつる事は、浄土の依正經(浄土三部經等)につきて、往生極樂の義をさとりきわめたまへる先達の(が)、宗の名をたてたまへるなり、宗のおこりをしらすもの、さやうの事は申也。

抑(そもそも)浄土一宗の諸宗にこえ、念佛一行の諸行に勝たると云事は、萬機を攝する方(すべての人にあてはまる、という方面)を云也。理觀・菩提心・讀誦大乘・眞言・止觀等はいつれも佛法のおろかにましますにはあらず、皆な生死濟度の法(苦しみから離脱する法則)なれども、末代になりぬれば力およばず、行人(実践する人)の不法(まちがい)なるによりて機(人の能力)は及(およ)はぬ也、時をいへは末法萬年の後、人壽十歳に促り、罪をいへは十惡五逆の罪人也。老少男女の輩、一念十念のたぐひに至るまで、皆な是れ攝取不捨の願にこまれる(籠もれる)也。故に諸宗にこえ、諸行にすぐれたりとは申也(もうすなり)とぞ仰られける、...昔の文章なので、むずかしげですが、雰囲気です...

~~~~~  
ここに見えてくる大事な点が3つ程あると思います。
1「宗」は、お釈迦様がかまえたものではない、その後のお弟子さんがたが顕わしたということ。
2 どの宗で言われる行法・道理も、仏陀の説かれた行法であるから真実であり、行う人の能力にあえば、必ず各宗めざすところの目的に至る。みな、すぐれた道理ある教えであること。

3 浄土宗という道理・法則は、すべての人々にあてはまる教えだということ。その理由は、仏陀の誓い・願いの力による道だから、行う人の能力・状況を問わないことにある。

「数ある仏陀の教えの中で、これこれの教えを指針とし、学びきわめられた道理にもとずいて、具体的な生活上の行為の指標までを見いだしました」という意味にとるのが妥当だと思います。「お釈迦様が説いたすべての教えの中で、これこれの教えを選んで指針とした、その選んだ教えの違い、指針の違いが、「宗」の違いだと云うことです。

理由は、一人の人が仏陀が教示なさった行法のすべてを實踐してそれぞれの行法に完璧な結果を出すことは不可能かつ道理に合わないからです。しかも、不思議なことに、どの「宗」という入り口から入っても、最終的には、「解脱」「涅槃」「悟り」に到達するという道理があるのです。それぞれに、難しい、易しい、早い、遅い、時代に合っている、合っていない、その人に合っている、合っていないなどの違いがあっても。

一つのことを實踐してちゃんと結果を出す、これが、「宗」として分類、伝承された理由です。目的はただ一つ、解脱のため、菩提(さとり)・涅槃(完璧な安樂)の為です。

だから、「宗」がたくさんあって、どれが真実なんでしょうか、とあれこれ悩んでしまうのは、かなりの損失です。

どれも真実なのです。生き死にの苦しみを離れる、という目的は同じでも、そのためのルートマップが違うので、全く違う体系に見えて当然なのです。ある一つの山の頂点をめざすのに、五合目からは唯一の道だけれども、その五合目に至るまでの道はいくつかあって、その道を歩んでいる間に見える景色は、皆全く異なっているような事です。それぞれの宗の教えが、皆全く違うのは、この、景色やルートマップが違うようなものです。

10 浄土宗以外の教えをどう受け止めたらよいのでしょうか?

最後に、どう上座部の教えを受け止めたらよいのかという事だけ、お伝えします。

テーラヴァーダ仏教というのは「上座仏教」ともいわれ、スリランカやミャンマー、タイなど南方に伝わった仏教のことです。これを「南伝仏教」といわれます。日本に伝わっている仏教はインドから西域(シルクロードの一部)を経て、中国・朝鮮を通った仏教で、「北伝仏教」といわれます。

11 正確に学ぶ余裕があるなら、お釈迦様の数々の教えを全て学んだってよいのです。でも、苦しみを克服する法則とそれに則った方法は一つの縁ある方法に絞るべきです。～一生は短いんです

浄土宗の伝わり事には「お釈迦さまが、お説きになった教えは、真実ですから、すべて信じます。」という態度があるのです。(これは他の宗派でも同じだと思います)しかし、實踐の上では、自分の能力(「身の

丈)にあわない修行法(自身のありように引き当てて、結果を出すのが不可能だったり、確実にない修行法)、消化不良をおこす修行法は、行なえません、という方針をとるのです。「みな素晴らしい教えだけれども、時代の違い、自身を省みた上でのわが身の能力によって、教えを完璧に実行するには「身の丈」が合わないのです。自身の能力にあった、きちんと完璧に実行出来る、この念仏の教えを選びます」という考えなのです。

だから、どの経典も(「上座仏教」のパーリー語経典も)、信じて学ぶことにはさまたげがないのです。

「上座仏教」は、この世界で、悟る道ですので、仏様の世界とか、他の世界には、関心を置く必要が無く、言及が無いだけです。そして、一生のうちに、悟りに達する道を教えます。先述のように、教えを受けてから悟るまでに、一般論では、極速で三生、極遅で六十劫かかります。そして悟りまでのどの段階でこの一生が過ぎるかは、その人の能力、ご縁によります。

この一生のうちに「涅槃」を悟ったなら、その人は三生まえに仏陀から教えを受けていて、二回の生涯、いろいろと努力を積み重ねてきた人だった、といえるのです。

悟れなくとも、悟りの第一段階にいたれば、その後どうこの世界で生まれ変わろうとも、完全に悟るまで、どれほど時間がかかろうとも、今の人間の境涯以下には墮落しない(三悪道に墮落しない)、という事にもなる教えです。私たちのような、善悪こもごもの状態では、私たちの能力が心細く感じる道だと思います。

そのかわり、この世界での物事の見方考え方にはしっかりした見解があります。だから、参考にはなるわけです。上座部仏教を實行できるならば實行すべきですが、一生のうちに、危なくない状態になるまで煩悩を断つには、個々人の能力が問われますので、自力の教え・聖道門～智慧をみがいて煩悩(心得違い)をなくして聖者になる道～といわれるのです。

この道は、王道ですが、はやく悟れるか、いくつもの生命としての生涯を経て遠い未来に悟れるかは行者(実践者)の能力に依るので、自力の教え・自力聖道門です。



煩悩を全く断たなくとも、佛力(他力)によって清浄な仏国土に生まれるのは、個々人の能力を問わないので、他力の教え・他力浄土門といわれます。

す。清らかな仏国土、阿弥陀様のおわす極楽世界に生まれる事によって、その国土での生活が始まります。清らかな国土での生活によって、煩悩の作用が無くなり、煩悩という心の作用である「痴」が智慧に、「貪」と「瞋」が慈悲の性質を帯びた心の作用に変わるのだといわれます。それは、阿弥陀仏の大慈悲のお心に触れて、往生した人の心が真の慈しみの成分でいっぱいになるからです。

自らの計らいをやめて仏様にお任せし、愚痴に還って～この世界に生まれた赤ちゃんのような状態、この身そのままの状態にもどつて極楽に生まれることによって自然に煩悩が無くなったり作用しなくなる道～と

言われるのです。

「教えを理解しようと学ぶ時間があるならば、悩み多き凡夫の状態から、煩惱が絶たれた聖者乃至仏陀の状態までをさわり無く学ぶ事は出来ます。でも、実践は、ご縁のある行法一つに絞りなさい。これが、労少なくして最も功があるやり方です」という言葉があります。これは、浄土宗のとる立場ですが、「何々宗」という違いにも、それぞれよく調べると理由やいわれはきちんとあると思います。

浄土宗では、人の品々の上下は問題にしません。だから、この文章でも、むずかしげだと思った部分は、「何か道理があるようですけど、まあよくわかりません」で十分なのです。

法然上人のお言葉にも、「念仏往生の実践・生活には学問はいりません。念仏往生の道理を信じる為の程だけ、聞き、学ぶべきです。よけいな学問は、かえって往生の妨げになります。」とあります。よけいかよけいでないかは、人それぞれ違います。このような、文書伝道ですと、一通りの事を書かなくてはならなくなるので、こんな雰囲気になりますが、読んで心に込めたいところは、忘れて一向にかまわないのです。



浄土宗の法要～マメ知識

開眼（かいげん）式

新らしく彫刻・図画した仏・菩薩像、曼陀羅、位牌、お墓、石塔などの手を合わせて拝むものを新造し入魂供養する法

会です。

これを一般的に魂入れ、お性根入れ、“開眼”（かいげん）といいます。この儀式によって、ただの紙や木や石が、仏や霊が宿ることになり、拝む対象になります。

新しくお位牌を求める時は、身近で亡くなられた方がいる場合が多いわけですが、茶毘（だび）にふし納骨してしまうと、お位牌が家の中での供養の対象となります。ですからそのお位牌を開眼供養することで、亡き人の魂にいつも身近にいてもらい、見守っていただくことができるのです。

その意味は、智慧の眼を開く（仏眼を開くに自ら入魂の意となる）ゆえに開眼といい大經上巻の「開彼智慧眼」という文がとなえられます。

わが国では、752年（天平勝宝4）4月9日に、東大寺大仏の開眼供養を行なったのが最初であるといわれ、以後各寺院で行なわれるようになりました。

～浄土宗ホームページより

当寺に墓石を建立して、「開眼式」がお済みでない方々には、是非とも「開眼式」をなさることをお勧めします。世間一般でも、未永く利用する構築物を建てたときは、「竣工式」などを行います。これらの「式」を行うのと、なにも行わないでそのままにしておくのとでは、「気持ちの区切り、整理、生き生きとした新鮮味」が違ってきます。せっかく寺院墓地を取得したのですから、大いにその長所を生かし、利用した方が良いと思います。くわしくは、事務方乃至住職まで、お電話でも結構ですので、お問い合わせ下さい。

秋のお彼岸の季節です。別紙の通り、お参り下さい。

幸福はどこにあるんでしょう？

幸福は、体の内側に感じるものです。

体の外側の物事にいくら幸福を追求しても、絶対に得ることは出来ません。何を見聞きしても、穏やかで、平静で、心がおちついていて、迷うことなく、活発に、感謝の気持ちで、怒らない、欲張らない、必要な物事を必要なだけ得る智慧を持ち、慈しみの心を育てて、人の為になることが、喜んで出来る、感情の法則を知って、心の力の法則を知って、謙虚でおおらかに、一瞬たりとも心を暗くしないように、努力するあまっている物事は、それがふさわしい人に施せば、それが喜びの財産になります。こんな調子の生き甲斐を作ってみませんか？

理解力・喜び・誠実・感謝・謙虚・知足・明るさ・正しさ・仲良く、ほかにもたくさん、これらが本当の「財産」だとも思います。

~~~~~  
おすすめの本

アルボムツレ・スマナサーラ長老の

『こころの復興』イースト・プレス ¥1300

仏教の基礎的な考え方もわかるし、納得がいく本です。浄土教の本ではありませんが、とてもためになり、読んで即効性もあります。（もちろん持続性も）

とにかく、損がありません。読んで何かを確実につかめます。

~~~~~  
MEMO